

運命の出会い



河原 多恵子 (かわはら たえこ)

フリーランス アナウンサー／コーディネーター

岩見沢市生まれ。北海道立札幌北高等学校、北海道女子短期大学体育科を卒業し、北海道放送(株)へアナウンサーとして入社、数々の番組を担当。2011年、第48回ギャラクシー賞ラジオ部門大賞受賞作、ラジオドキュメンタリー「インターが聴こえない～白鳥事件60年目の真実～」のナレーション担当。2012年2月からフリーランスとして活動、朗読会や言葉のワークショップなど開催。HBC-R「多恵子の今夜もふたり言(毎週日曜21:00～21:30)」パーソナリティー。

目を凝らして物を見ているわけでもないのに、どうやら他人より見えるらしいのです。といっても、幽霊が見えるということではなく、小さな虫や蜘蛛、何かにまぎれ込んだ髪の毛や糸くずなど見つける特技があるようです。例えば「蜘蛛」。読書中、左の視野に黒く動く物体が入ってきました。顔を向けると大きな蜘蛛です。ギャアと叫ぶといなくなりましたが、どこに消えたのでしょうか？みんなが使うトイレットの洗面台、鏡の前に落ちていたのは一本の長い髪です。お化粧直しに夢中で自分の顔しか見ていない様子が目に浮かびます。もしかすると私の髪かもしれないと思いつつ、「こんなに長くない！」と即座に否定。しかし、見つけたからには気になるもの。洗面台にへばりついた髪を紙でつまみながら、心の中で「立つ鳥、跡を濁さず(少々大きさですが?)」とぶつぶつ。よく見つけるねと言われても、見えるから仕方ありません。こう話すと友人は、「出会い力がある」と笑います。それならばぜひ、恋愛における「運命の出会い力」が欲しいのですが？ともかく、持ち前の観察力を駆使して、これからの世の中をしっかりと見据えなくてはなりません。

【お】

時代や社会を反映する新しい言葉。スタイリッシュな語感に出会って感心したりうろたえたり。こんなとき、つくづく言葉は生きています。「美文字」。この言葉が登場したのはいつ頃でしょうか？愛用する1995年版辞典には見当たらず、造語や言葉の短縮には慎重派ですから美文字にも少々ひっかかりました(笑)。しかし、美ボディや美魔女同様、意味がストレートに伝わる実用的な言葉だと思います。

「自分の名前を美しくすらすら書きたい」。芳名帳やご祝儀袋に名前を書く度、心に響く美しい文字の持ち主を羨ましく思ってきました。会合で記名をうながされると覚悟して筆を持ち、ほとんどの場合は立ったまま書きますから、後ろに人が待っているとなると一層

乱れます。しかも、身についた達筆(?)は簡単に変わるはずもなく、手書きのメモや原稿が判読できなくてあわてることも多々。こんなことから一大決心、書道のお稽古を始めました。慣れない太筆を使って恐る恐る「一・上下・あいうえおかきくけこ」。話し言葉も・読み言葉も・書き言葉も、どれも難しいものですね。いつの日か「美文字」をお見せできますようにと願って精進します。

さて、最近の本のタイトルで「美しい・正しい」や「敬語」とつくものを多く見かけます。読まずにいられない性分ですので、美文字本と合わせて読破中。読めば読むほど、使えば使うほど、言葉の面白さが実感できます。

ところで、「お」の使い方で迷ったことはないでしょうか。「ご」は漢語につき、「お」は和語につくのが原則とされますが、果たして「お」か「ご」か、要るか要らないか、使い方は正しいか?発する前に言葉の分析を始めるほど、大人の言葉づかいは複雑です。

その「お」は変じゃない?こう思う場面に出会いました。買い物先でのこと、欲しいものは品切れ。対応した女性は、わざわざ来店してくれたのに申し訳ないと詫びてから、「オウリキレでございます」。「オ・ウリキレ?!」と私。不意を突かれ、初めて聞くフレーズにドキドキ。仲間うちの会話なら「それ、おかしい!」とか、むやみに「お」を付ければ良いというものではないと言い切るところですが、そうはいきません。おっかなそうなオバサンに最大級のお詫びを述べた結果なのでしょう。「お」に圧倒され、逆にこちらが恐縮したやりとりでした。

クリスマスローズ

「運命の出会い!」では大げさに聞こえますが、私にとってはまさにそれでした。フラワーショップの玄関先、白い花をつけた鉢が外に置かれたままになっています。一週間前もドアの外にあった鉢花。これが「我が家のクリスマスローズ」との出会いです。年末、真

冬の北海道で、花の咲いている鉢を戸外に置くなど花好きには考えられません。きっとワケがあるはず。いったん通り過ぎたものやはり気になって戻り、店のドアを開けて「あれは?」。花はクリスマスローズの原種「ノイガー」。名前の通り、クリスマスのあるころ、森の奥深くでひっそり、純白で小ぶりの花を咲かせる品種だそうです。だから寒さには強く、逆に陽だまりでは葉が黄色くなってしまうと教わりました。冷たい空気の中で天を向き、凜として咲く姿を眺めているうち、「この花は私を呼んでいる(に違いない!)」。購入した鉢を抱えてそわそわする私にフローリストは、「くれぐれも暖かな場所に置かないこと。お日さまより日陰ですよ」と、冬の鉢花管理の逆に行くアドバイスをします。以来、鉢から庭へと植え替えたクリスマスローズは、厳寒期、寒さと雪の重みをもものともせず、雪の下でたくさんの蕾をつけてくれます。というのも、毎年1月末になると花を確かめたくてウズウズ、庭の雪山に穴を掘って探してしまうのです。そこにはたくさんの蕾や花が!雪をほろった指先が冷たいのを忘れて愛おしさに感動~。クリスマスローズは種を結ぶとそれが弾け飛び、こぼれた種が思いがけないところに芽を出します。コンポストにゴミ捨てに行く途中でそれを見つけ、「踏んではならない!」



クリスマスローズ・ノイガー